甲野勇氏資料でみる

顔面把手付土器

国立市指定有形文化財

縄文時代中期　BC3,000 年頃 (暦年較正年代)
南養寺遺跡出土　勝坂式土器

公式キャラクター トッテー

くにたち郷土文化館の常設展示室に入ると直ぐに、人面を模した把手が付いた土器「顔面把手付土器」が展示されています。この土器は、昭和 34（1959）年 10 月に考古学者 甲野勇氏指導の下、国立町教育研究会社会科部を中心に実施された発掘調査によって、およそ 5,000 年の時を越え、出土しました。調査に参加した国立第一中学校の生徒が、地中に埋まった土器片を発見しています。出土地点は国立の南部、臨済宗の古刹 南養寺の南側にある畑地でした。

くにたち郷土文化館常設展示室

右の写真が、掘り出された土器片を接合した状態です。口を下にして逆さまに埋まっており、耕作の際の鍬入れで胴下部が破壊されたためか、発見されたのは口縁部のみでした。

顔面把手付土器は、顔が内側に付けられているものが多く、この土器の様に把手の両面に顔が造形されているのは非常に珍しい例です。また、把手の下には、三本指を持った左右に広げた手の表現がみられます。

把手部分は中空になっており、見る角度により目に光が差し込み、表情が変化します。甲野氏は「これは観光地のお寺などによくある、八方ニラミの竜などといわれるものと同じで、作者の意図しなかった偶然の結果である」、「できあがった土器を見た当時の人々はおそらくこの目の表情の変化に気がついて、私たちと同様、いやそれ以上に、おどろきの声を上げて眺めたのではないだろうか」※と、縄文時代に想いを馳せながら評しています。是非この表情に注目して鑑賞してみて下さい。

出土した顔面把手付土器 (接合状態)
甲野勇氏資料

旧復元　甲野勇氏資料

現在の復元

破壊されてしまった胴下部と把手の先端部分を想定復元したのが、現在、当館の展示室でみられる顔面把手付土器です。

実は現在の形に復元される前に、別の形で 1 度復元がなされています。その時の土器が、左の「旧復元」の写真です。胴下部は復元されていますが、把手先端部分の破損はそのままです。その後、把手先端部分の復元と、胴下部が復元し直されました（胴下部は、勝坂式土器の特徴であるそろばん形に直されています）。

◆本紙で紹介した顔面把手付土器のレプリカが、
国立歴史民俗博物館の常設展で展示されています。

※甲野勇「顔面把手について」『多摩考古』2　1961 より

くにたち
郷土文化館